

# 謎まるるのルーツの生人 弥生

## 青谷上寺地遺跡 人骨DNA分析

弥生人はどのようにして誕生したのか——。国史跡・青谷上寺地遺跡（鳥取市青谷町）で発掘された弥生時代後期（2世紀）とみられる人骨のDNA分析が今年から始まった。32人分のDNAを解析したところ、1人の縄文人系をのぞいて31人が渡来人系だったことが分かった。縄文人にだんだん渡来人が混じって弥生人になるといふこれまでの定説とは少し違う様相となっている。

### 32人中31人が渡来人系 推測と相違



青谷上寺地遺跡から人骨が出土した時の様子

人骨のDNA分析を進める研究班代表の国立科学博物館（茨城県つくば市）の篠田謙一副館長（人類学）によると、2000年に同遺跡の溝から見つかった人



DNA分析される青谷上寺地遺跡から出土した人骨。いずれも県埋蔵文化財センター提供

#### 青谷上寺地遺跡

鳥取市中心部から約20キロ西の同市青谷町にある弥生時代を中心とする集落遺跡。出土物の保存状態の良さから「地下の弥生博物館」と称される。現在は日本海から内陸へ約1キロに位置しているが、当時は入り海（古青谷湾）に面しており、交易が盛んだとみられる。DNA分析されているのは2000年に100体分以上見つかった弥生時代後期のものとみられる人骨の一部。人骨のうち3点の頭蓋骨（ずがいこつ）からは脳の一部が見つかった。

陸の各地で見られる配列（渡来人系）はパターンが異なることが分かっている。

骨の上あごごと下あご計37個からDNAの採取を試みたところ、34個から抽出できた。うち、同一人物のDNAを上あごごと下あごから採取したとみられる二つをのぞき、32人分について、母系のルーツが分かるミトコンドリアのDNAを分析した。

遺伝情報であるDNAは4種類の塩基（A、T、G、C）が連なったもので、その配列パターンは血縁関係や人種に近いほど似たものになる。これまでの研究により、縄文時代の日本列島に多く認められる配列（縄文人系）と、中国大

母の各地で見られる配列（渡来人系）はパターンが異なることが分かっている。

32人のうち、母親（祖母）が同一と思われる人は

3人しかおらず、国立科学博物館とともに研究する県埋蔵文化財センターの浜田竜彦係長は「当時、海に面していた青谷上寺地遺跡からは朝鮮半島を経由して輸入されたとみられる土器や鉄器も出土している。日本海を舟で行き交う人がおり、渡来人も集まる『山陰地方を代表する交易の拠点』だったことは確実にす」という。

DNA分析をした今回の人骨は溝から散乱した状態で大量に見つかったもの。墓などの中に丁寧に埋葬された様子がなく、刃物ややじりによる殺傷痕のあるものも含まれている。これらの人々がどのような経緯でこの地でくつくなったかなどを知る手がかりは今のところないという。

今後はこの核DNAの分析で、父親のルーツを追跡したり、その膨大な遺伝情報をつかって渡来人や縄文人の中でもどんなグループに分類できるかを調べたりすることで、謎を明らかにしていくという。